

二国間交流事業 共同研究報告書

令和4年4月28日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
京都大学・教育学研究科
[職・氏名]
教授・齊藤 智
[課題番号]
JPJSBP 120209916

1. 事業名 相手国: 英国 (振興会対応機関: OP) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) 実行機能を支える方略的スキル知識の獲得とその発達に関する国際共同研究

(英文) Acquisition and development of strategic skill knowledge for executive function in adults and children

3. 共同研究実施期間 2020年4月1日 ~ 2022年3月31日 (2 年 0 ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

University of Bristol School of Psychological Science, Professor, Christopher Jarrold

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		3,800,000 円
内訳	1年度目執行経費	1,900,000 円
	2年度目執行経費	1,900,000 円
	3年度目執行経費	円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	4名
相手国側参加者等	4名

* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	0	0	0(0)
2年度目	0	0	0(0)
3年度目			()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣:委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。
受入:相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

「実行機能を支える方略的スキル知識の獲得とその発達」を研究のターゲットとした国際共同研究を実施することで、(2)に述べる学術的価値の創成に加え、当該分野における国際ネットワークを強化し、若手研究者が国際舞台で活躍できるようなトレーニングの機会を提供することを目的としていた。ブリストル大学およびケンブリッジ大学という世界トップクラスの大学の教授陣に加え、英国の若手研究者と共同研究を行うことで、直接的な学術成果だけでなく、世代を超えた国際ネットワークの維持に寄与する学術交流を実施できた。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

「実行機能を支える方略的スキル知識」が獲得されるという事実そのものが大きなインパクトであり、その発達過程をも視野に入れた研究成果は、当該分野の国際トップジャーナルである *Developmental Science* に採択されている。この成果は、国際誌にすでに引用されるなど、注目され始めている。今回得られた成果はさらに、2編の国際共著論文として、国際トップジャーナルに投稿され、現在、審査中である。これらの論文が採択された後には、さらに今回の研究成果が大きな影響力を持つものと期待される。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

新型コロナウイルス感染症拡大のため、相手国を訪問することはできなかったが、オンラインによるミーティングを定期的に開催し(計 21 回)、実際の訪問とは異なる形での密で継続的な交流を実現できた。こうした濃厚な研究交流はさらに、英語論文執筆へと進み、上記の通り、多くの国際共著論文を生み出した。これらは、代表者がこれまで、それぞれ独立に培ってきたブリストル大学およびケンブリッジ大学との共同研究を統合したことで初めて実現された成果であると考えている。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

「実行機能を支える方略的スキル知識」は、文化に根ざした知識であり、その獲得と発達を検討することは、まさに文化の伝承と発展の基盤を探ることになる。本研究から得られた成果は、今後、日本語でも紹介されていくことで、「社会の基盤となる文化の継承と発展」のメカニズムを浮き彫りにし、そのことにより大きな社会的貢献をなすものと期待される。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

今回のプロジェクトにおいては、日英の若手研究者が中心的な役割を果たし、特に日本人若手研究者は、国際共著論文の筆頭著者となっている。日本の若手研究者が、これらの論文の執筆に貢献する中で、国際的に活躍する次世代の研究者へと成長しつつあることが確認できている。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

今回のプロジェクトは、当該分野における強力な国際研究チームを作り上げることに寄与した。この共同研究は、継続する予定であり、新たな予算獲得も試みている。

(7)その他(上記(2)~(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

大学院生として本プロジェクトに参加した倪楠は、ケンブリッジ大学との共同研究の内容が評価され、京都大学教育学研究科同窓会から、国際賞を授与された。